

嶋久子

雪の金閣寺。まるで絵葉書のような風景である。短歌は美しい風景をうたうのではなく、うたうことによつて美しい風景になるのである。つまり美しい風景をうたうのは不得手な詩形なのだが、この作たんたと表現しきつている。「佇つ」はいかが。思いが入りすぎ。

雨水なりみづいろの空をはしる雲純白が抱くあはき
灰色 経塚朋子

空を移動する白雲の一部が灰色で、白が灰色を抱いているように見える、というのである。一首の中に、水色、灰色、純白、三種の色が出てきながらごたごたしていない表現力。

貯水湖の底があらわに照らされて今年の夏の力を見
て過ぐ 青木泰子

「夏の力」という表現に注目する。干上がった貯水湖を見て、「夏の力」を見てとった感性がいい。

春風の烈しきを賞でこの空に掃除機をかける腕うでを思
う 田中章義

「春一番」の歌だと思う。春一番は天空の誰かが掃除機をかけるのだ、というアイディアである。「烈しきを賞で」が、このアイディアを作品化するときの核になっている。なお、「選歌ルーム」で伊藤一彦が指摘しているように、「この空に」の「この」は一考の余地あり。

アザラシの子もその母も聴いているアイルランドの
海の子守唄 鶴沢梢

この一首だけを読んでも、メルヘンのなかに迷いこんだような、不思議な魅力がある一首と思う。一連中に、アイルランドの「海の歌」というアニメ映画をうたった作があるので、もともとはアニメ映画のある場面が背景をなす作らしい。

余りでは寂しく思う残り生まをまだだめだよと雇用さ
れたり 太田裕万

定年後の雇用のことをユーモラスな味付けで軽くうたつていて、注目する。定年後の時間を「余り世」と呼ぶのは寂しいだろうと言う。作者はむろん「余り世」とは思っていないのである。

あさなさなオリーブを食はむ少年の物売る声の響くバ
ス停 梅原ひろみ

場所はどこだろう。日本ではなさそうである。一連中に「アレツポ城」が出てくるので、シリアの古都アレツポらしい。スナップ写真のように、軽くうたつて雰囲気を出している。

あざやかに春浅き空暮れ行けりほのかに野火の煙の
匂い 小笠原政雄

野焼きは、春を迎える古くからの行事。季節の歌として格調の高い歌である。とくに「ほのかに野火の煙の匂い」という下句にひかれる。空の一角、どこからともなく煙の匂いが風につてくる気配。子供のころの懐かしい気配を思い出す。都会に住んでいると焚き火ささえほとんど見ることがなくなつてしまった。